

本覚思想と真宗

本覚思想とは

- <本覚>とは、『大乘起信論』にある語で「衆生に内在する覚りの本性」の意味。(cf.不覚、始覚)
- <仏性><如来蔵>は、客塵煩惱に覆われた「仏を生み出す基体」を意味するから、実際に覚を得るための実践として苦行を強調するのに対し、<本覚>は単なる内在的可能性ではなく、「現実に関りをひらいている」という意味で使われ、修行の必要性が否定され、かつ大胆な現実肯定主義となる。
- 如来蔵思想はインド大乘中期に生まれたが、有情と非有情を区別する観点が残っていたのに対し、本覚思想は中国で生まれ、有情と非有情の区別を否定した。「草木国土悉皆成仏」
- しかし両者はしばしば同じものと扱われることがある(基体説)。より正確には、如来蔵思想の中国的展開が本覚思想であり、中国の土着思想(老荘思想)と結びついて定着した。
- 日本では中古天台において本覚思想が浸透定着するようになり、法華経重視の中国の天台宗および日本の初期天台宗と区別して<中古天台本覚法門>とよばれる。鎌倉仏教はそれを克服していった面と、強い影響を受けた面がある。
- 大乘仏教でいう「煩惱即菩提」「生死即涅槃」とは、本来、仏の立場(あるいは覚りをひらいた立場)からいうことであって凡夫がいうことではない。また煩惱や迷いを肯定しているわけでもない。しかし、これが本覚思想によって積極的に利用されたため、本来の意味とは違って使われるようになった。

二種深信～本覚思想の否定

「『深信』と言うは、すなわちこれ深信の心なり。また二種あり。一つには決定して深く、『自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし』と信ず。二つには決定して深く、『かの阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑いなく慮りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得』と信ず。」(観経疏／教行信証215-216頁)

- 機の深信→如来蔵・自性清浄心の否定
- 法の深信→『無量寿経』を真実教として選び取ること

老荘思想～本覚思想の基盤

- 老子の存在論

道：老子の説く「道」は孔子の「道」と異なり、「万物がそこから生まれ、そこに帰っていくところの根源」という形而上学的な意味合いを含む。

- 老子の倫理思想

無為自然：人為を徹底的に排除し、大宇宙の根源である「道」にしたがってあるがままに生きることが大切であると説いた。自然＝「他者の力によらないで、それ自身に内在する力によって、そうなっていること」(森三樹三郎)

● 莊子の存在論

天：無限の時空を通じて万物を支える根源。天は一定の秩序たる「道」にしたがって万物を変化させる。この「道」は知性に拘泥せず己れを空虚にすることによって体得できる。したがって天を絶対としてそれへ従うことが肝要である。天の道という観点から見れば万物はすべて等しい価値を持ち（万物斉同）、善悪の議論は相対的である。

● 莊子の倫理思想

真人：社会という人為的な束縛から脱して自然の中に回帰し、天の理にしたがって自由な境地で生きる人間を真人とよんで尊んだ。

無用の用：一見すれば役に立たないようなものが視点をかえれば実は役に立っているというような自由な発想が大切である。

一念義＝本覚思想＝仏教の異端

- <一念義>浄土宗で法然の門弟幸西らの主張した教義。浄土に往生するには一度の念仏だけで十分であり、多く念仏する必要はないとするもの。その正反対は<多念義>で、浄土に往生するためには多く念仏する必要がある、というもの。浄土宗では共に異端とされる。
- <一念義>は本覚思想の影響を受けて成立した(?)少なくとも両者の間には論理的なつながりがある。本覚思想が、「あらゆる有情・非情は現に覚りをひらいているから、改めて修行をする必要はない」というのと、<一念義>が「既に阿弥陀仏によって往生を約束されているのだから、それ以上の念仏は必要ない」というのとは、ほとんど紙一重。
- <一念義>は<造悪無礙>（悪をなしても信心さえあれば浄土往生できる、という説）と結びついて、社会的に問題視され、浄土宗弾圧を招く一因となった。この<造悪無礙>説じたい、本覚思想に由来している。
- 親鸞は<一念義>派とみなされることがある。その理由として、(1) 幸西や行空との親しい関係、(2) <現生正定聚>説（生きている間に覚りを約束された地位につく）の2点があげられる。しかし、(1)は決定的証拠ではない。また、(2)は現生で約束されるのは正定聚までであって、覚りはあくまでも来生なのだから、かろうじて本覚思想を免れている、というべき。
- 親鸞は「信をはなれたる念」「念をはなれたる信」を共に否定している以上、<一念義>派と断定はできない。しかし、<自然法爾><如来等同><便同弥勒>説はきわめて本覚思想に接近している。（唯信鈔文意対校本参照）

自然法爾＝老莊思想＝外道

「自然」とは、もとよりしからしむということばなり。弥陀仏の御ちかいの、もとより行者のはからいにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまいて、むかえんとはからわせたまいたるによりて、行者のよからんともあしからんともおもわぬを、自然とはもうすぞとききてそうろう。ちかいのようは、無上仏にならしめんとちかいたまえるなり。無上仏ともうすは、かたちもなくまします。かたち

もましまさぬゆえに、自然とはもうすなり。かたちましますとしめすときは、無上涅槃とはもうさず。かたちもましまさぬようをしらせんとて、はじめに弥陀仏とぞききならいてそうろう。弥陀仏は、自然のようをしらせんりょうなり。この道理をこころえつるのちには、この自然のことは、つねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすということは、なお義のあるべし。これは仏智の不思議にてあるなり。」(511頁)

<約理の二諦>と<約教の二諦>～真理論

- <約理の二諦>成実論学派の主張。俗諦は迷いの凡夫のありかたであり、真諦は仏のありかた。二諦の関係は、俗を捨て真を取るという意味で不可逆的なものであり、二者択一的である。二諦はともに<理>であるが、前者は邪分別(偽)であり、後者は正分別(真)である。
- <約教の二諦>三論学派の主張。俗諦と真諦を区別した上で、両者を同価値のものとする。すなわち、俗諦は凡夫にとっての方便、真諦は聖者にとっての方便であり、ともに言葉を超えた<理>を覚らしめるための方便。すなわち、二諦という概念は教法に限定される。
- 両者の違いは、言葉と真理との関係をどう見るかによる。<約教の二諦>が真理を言葉を超えたもの・言葉によっては表現できないものとして実在すると主張するのに対し、<約理の二諦>では言葉(仏語)こそ真理であると主張する。

親鸞思想の二つの系譜

- A. 成実論学派 - 善導 - 法然 - <二種深信>
- B. 三論学派/格義仏教 - 曇鸞 - 中古天台 - <自然法爾>

● 仏身観

A. 化報二身論

釈迦(化身)・弥陀(報身)二尊

釈迦を教主とし阿弥陀を救主とする、救済論の次元での二身説

「今日仏を見たてまつること釈迦の恩なり。仏語に随順すれば弥陀を見たてまつる。」(般舟讃)

「釈迦はこの方より発遣し、弥陀はすなはちかの国より来迎したまふ。かしこに喚ばひここに遣はす、」(観経疏)

B. 法性法身・方便法身の二身論

方便法身は法性法身に由来し、衆生に法性法身をさとらしめる働きとして存在する。相即・相入の関係。

法身の先験性を前提としている点で、如来蔵思想と同質性をもつ。

「法性法身によりて方便法身を生ず。方便法身によりて法性法身を出す。この二の法身は異にして分つべからず。一にして同ずべからず。このゆゑに広略相入して、統ぶるに法の名をもつてす。」(浄土論註)

● 観察～観経の第八観理解をめぐって

「諸仏如来はこれ法界の身なり。一切衆生の心想の中に入りたまえり。このゆゑに汝等心に仏を想う

時、この心すなわちこれ三十二相・八十随形好なり。この心、作仏す。この心これ仏なり。諸仏正遍知海は心想より生ず。このゆえに应当に一心に繫念して、あきらかにかの仏・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三仏陀を観ずべし。」

A. 観＝智慧の観

「『観』といふは照なり。つねに浄信心の手をもつて、もつて智慧の輝を持ち、かの弥陀の正依等の事を照らす。」

観經の第八觀の「法界」を如来蔵・真如とは理解せず、仏に教化される衆生の世界と理解する。

「『法界』といふはこれ所化の境、すなはち衆生界なり。『身』といふはこれ能化の身、すなはち諸仏の身なり。」（観經疏）

B. 観＝vipaśyanā＝観仏三昧

仏国土と阿弥陀仏と諸菩薩の莊嚴功德を対象化して観察する

法性法身には形相がないので観察の対象にならないが、方便法身を観察することにより、法性法身を間接的に体験する。

観經の第八觀理解において、衆生における仏の内在を認める。

「『諸仏如来はこれ法界身なり』といふは、『法界』はこれ衆生の心法なり。心よく世間・出世間の一切諸法を生ずるをもつてのゆゑに、心を名づけて法界とす。法界よくもろもろの如来の相好の身を生ず。」（浄土論註）

● 浄土観

A. 西方の浄土

「あるいは行者ありて、この一門の義をもつて唯識法身の観となし、あるいは自性清浄仏性の観となすは、その意はなほだ錯れり。絶えて少分もあひ似たることなし。」「総じて無相離念を明かさず。」「相を離れて事を求むるは、術通なき人の空に居して舎を立つるがごとし。」（観經疏）

B. 唯心の浄土

● 機根

A. 機根の不同の否定

「もし衆生の垢障を論ぜば、実に欣趣しがたし。まさしく仏願に託してもつて強縁となすによりて、五乗をして齊しく入らしむることを致す。」（観經疏）

個人の内面的性質の違いではなく、教法の真偽を区別。

「ただ縁に遇ふに異なることあるをもつて、九品をして差別せしむることを致す。」

「いまの時の善悪の凡夫をして同じく九品に沾はしめんと欲す。信を生じて疑なければ、仏の願力に乗じてことごとく生ずることを得。」（観經疏）

B. 宗教的差別思想

女性・二乗（声聞・縁覚）・根欠（障害者）の往生を否定した唯識派の世親（五性格別説）

「大乘善根の界は、等しくして譏嫌の名なし。女人および根欠、二乗の種生ぜず。」（浄土論）

曇鸞は唯識派ではないが、浄土論の立場をそのまま引き継いでいる。